

取材を終えて——担当者誌上クロストーク

全曹青広報委員(委託)

長岡俊成 × 川口高裕

長岡 今回の取材では、個性の異なる4ヶ寺を訪ねました。始めに、4つのケースでの共通点や相違点についてまとめていきたいと思えます。まず、私の印象に残ったことですが、どの住職も熱く語られていたことからそれぞれの取り組みに対する情熱が伝わってきました。

川口 私も同様にどなたからも強い熱意を感じました。やはり、これが一番の原動力ではないでしょうか。

長岡 寺族の協力も不可欠です。檀信徒や共鳴してくれる方との強い連帯感、寺院を支えてくださる方は貴重な人的資産です。普段から信頼関係を構築していくことが大切ですね。

川口 そして、活動を始めるきっかけは、意外にも単純なことや、誰しもが考えられることが多いように感じました。

長岡 そうですね。ただ、実際に行動に移すとなれば粘り強く、忍耐強くやっていく覚悟が必要です。長年にわたる地道な努力あってこそ活動が可能になると思います。

川口 また、どのケースでも集まり易さや安心感など寺院である利点を活かし、地域のニーズに合ったことをされています。『二塚よりどころ』は、共働きや高齢化が進む地域で、お年寄りから子供までが安心して暮らせるような社会を作るために活動を始められています。

長岡 他の寺院が地元の協力を得て活動を始めたのに対し、『上総自然学校』は地元の協力がなかなか得られないという点で、広域から志や目的を共にする人を集め、活動を展開していかれました。外部の目で、地元の様々な価値に気づいてもらい、外から地元の人を巻き込んでいます。

川口 NPO法人格の取得については意見が分かれました。それぞれの活動が、社会に認知されるべきと考え、積極的にNPO法人格を取得するケースと、公益は寺院のあり方として当然のこととする考えや、活動の幅を広げるためにも法に縛られ

より良き「縁の場」であるために



長岡俊成



川口高裕

たくないという考えからNPO法人格を取得する必要はないと考えるケースがありました。

長岡 次に、公益法人である寺院のあるべき姿についてです。実際に、活動の内容によっては地方であっても都心部から人が集まってきています。そして更に活動の幅が広がっていきます。これは希望のあることです。

川口 これは『應典院寺町倶楽部』の秋田師のお言葉ですが、昔の寺院は地域の公益の拠点でしたが、それが今では国や自治体が担っています。昔のように、「地域のよりどころ」となって、誰もが気軽に立ち寄れる寺院作りをする必要があるのでしょうか。

長岡 最後に、宗門寺院や宗侶が実践すべきことについてです。どの師も、お寺という枠を飛び出して一人の人間として社会に飛び込むことが必要だと説かれています。そして、「まだまだ僧侶は期待されている」という言葉は大きいですね。期待されている以上は、最後のチャンスだと思っただけに伝えていくべきです。私たち僧侶に対して信頼を寄せてくださる方がおられるということを念頭におき、僧侶として自信を持って行動していきたいです。

川口 お檀家さんたちだけでなく、地域へ広く情報発信できるようにする必要がありますね。そして、まずは持続させるということからも、坐禅会のような身近なこと、私たち曹洞宗宗侶が取り組むべきことから始めていくことが大切である、と伺いました。

長岡 『燭光』の一戸師のお言葉が印象に残ったのですが、僧侶の衣のベールを脱いで、人々の苦悩に寄り添い、仏教者として何ができるか、何をすべきかを真剣に考えることから、活動は始まるのですね。そして、どんな小さなことでも、まずは活動を始めることで、縁が築かれ、さらにその縁が縁を呼び、活動の幅が広がり、活動が深まっていくのではないのでしょうか。